



福井大学教育学部
附属義務教育学校

No.02
令和6年7月5日

学校だより

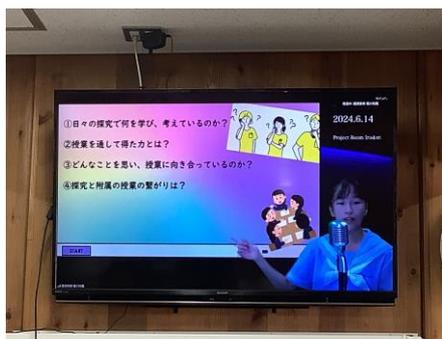
「子どもと教師が共に楽しみ味わっていく単元のデザイン」をめざして
令和6年度 附属幼稚園・義務教育学校教育研究集会 開催

前期課程 副校長 寺前 公恵

6月14日(金)に開催した今年度の教育研究集会には、県内外から約450名(シンポジウムのオンライン参加者を含む)の参加があり、本校の研究に対する関心の高さを実感しました。

今年度は「子どもが語る」「子どもと語る」「子どもと創る」をキーワードに、「子どもと教師が学びを協創する未来」について参加者と共に考えていくことができました。その試みの一つとして、生徒会主催のポスターラウンドがあります。5年生以上の子どもたちによるポスターセッションは昨年度も行っていましたが、「参加してくださる先生方とテーマをもとに直に語り合いたい」という子どもの思いから、今年度はポスターラウンドに進化しました。もう一つの新たな試みは、授業後の分科会に後期課程の生徒(希望者)が参加し、教師と共に語り合うことです。

ポスターラウンドでは、参加者と児童・生徒が活発に議論を繰り広げていました。例えば、テーマ「ツバメの研究」では、前期課程の児童と後期課程の生徒との交流が見られました。生徒からの「どんな力がつきましたか」という問いに、児童は「ツバメのことをよく知りませんでした。ツバメを研究したことによって、みんなと協力して調べる力がつきました」と話していました。テーマ「附属の数学 生徒のつぶやきが授業を創る」では、「どんなことを考えて先生は授業していますか?」という生徒の問いから始まり、参加された先生方からは「みんながどんな疑問をもつか考えながら授業している」「附属の子は、気づいたことを率直に言葉にできることがすごい。教師がファシリテータとして拾うのもすごいけれど、自分たちで授業をつくらうとするから言っている」「9年生まで培ってきたからこそできる。それを今日は見たい」「ダイナミックな学びになることはわかるんだけど、そこにあるものをこなさなきゃと思う気持ちも自分にはある」など、次々と課題を織り交ぜながら本音で語ってくださいました。また、生徒からは、教師と生徒の距離感にも質問が及び「フレンドリーな関係だと話しやすい」という意見が出されていました。ポスターラウンド・分科会共に、その距離感で自然に語っていたのが印象的でした。



生徒会執行部によるオープニング(LIVE中継)・ポスターラウンドの様子(「ツバメ研究」「附属の数学」)

生徒が参加した分科会では、生徒からは「先生がわかっていないことを一緒に考えて探究したい。先生がわかっていることを探究するのは教えられている感じがする」「好きなことはいずれ得意になると思う」教師からは「子どもは自分たちで授業をつくったというやりがいを感じていた」「子どもが語れる、アドバイスし合えることが素晴らしい」「いい気づきがつぶやきで終わり全体に広がらない。子どもに完全に任せることが難しいときもある」等の意見が出ていました。



当日の授業の様子・生徒と教師が共に語り合う分科会の様子

参観者からは、「協創のテーマのもと、子どもたち自身が学びの主体者として学びに向かっている姿が素敵でした。皆で学ぶことの楽しさを感じているからこそその姿だと思います。子どもを主人公にしようとする研究に共感します」との感想をいただきました。

シンポジウムでは、シンポジストの先生方（学習院大学 教授：秋田喜代美氏、慶應義塾大学教授：鹿毛雅治氏）から、本校の学校文化に触れるとともに、さらなる課題をいただきました。

○学力の三要素「①知識・技能②思考力・判断力・表現力③学びに向かう力・人間性等」この3つを別物と捉えている先生が多い。心理的に良い学びは三位一体で考えられる。そのようなプロセスの中で「やる気」というのは育まれる。3つのモチベーションのポイントは「やりたい」「やるべき」「やれそう」である。子どもがそう思える仕組みをプロセスの中に取り入れていく。このような授業は人間を育む授業である。本校の実践は将来を育む人間を育てている実践である。

○「振り返り」は誰のためにやっているのか。大事なのは、子どもの学びが次につながっていくこと。最後は「はてな？」で終わってほしい。次に何を解明していきたいのか、メタ認知も含めて、それを継続的にやっていくことが大事である。

○教育環境をどうデザインするのか。「協創」というのは簡単だがやるのは難しい。「子どもと教師が共に楽しみ味わっていく単元のデザイン」であってほしい。多様な子どもに寄り添ったデザイン。「ロングスパン」も大事だけれど「一瞬一瞬」も大事。子どもの気づきに気づくこと、つまり「教育的瞬間」をうまく捉えたり支えたりすることが大事である。その先に学びがいが見出せるか。それは、学校の内側だけでなく外側まで広がっていく。教師が支えるからこそ、胸に刻み込まれるような学びになる。

今年度は、研究主題「探究し協創するコミュニティ」研究副題「共に学びを拓くカリキュラムを創る」と設定し、すべての子どもが共に学び、多様なあり方を認め合える学校の実現に向けて研究を進めています。教育研究集会を終えて、子ども自身の語りが私たち教師に多くの学びを与えてくれました。私たち教師は、「子どもの育ち」を第一に考え、子どもの気づきに寄り添ったデザインを、子どもと共に創っていきたいという思いを新たにしました。